



「苑」この人に会いたい
映像作家 新藤兼人さん(92歳)

新藤

兼人

Shindo Kaneto

ひとりも

捨てたものじゃない、

失った人の思い出が

寄り添ってくるから。

白髪と不釣り合いなほど、陽に灼けた精悍な面差し。深く黒い、鋭い眼が時には遠くをみつめ、また一瞬、いたずらでも思いついたかのように煌く。

47本の監督作品を併せて200本近い脚本を現在も現役で創り続ける新藤兼人さんは、嘘のようだが真正正銘、明治末年生まれの92歳。古武士の風格と朴訥な熱血青年が同居している。

真つ向勝負のラスト・サムライ

妻で女優、そして仕事の同志でもあった乙羽信子さんが亡くなって10年。

一人暮らしの部屋は、乙羽さんが使った椅子、机、鏡台、食器……、すべてそのまま。

「ここに乙羽さんが居るよう、とは考えませんが、死んだんですから。何も変わっちゃいない。ただ、わたしが生きている、というだけです。そして、わたしは、生きているかぎり仕事をしたんです。」

そう語る新藤さん。

今年2月に公開された新作映画「ふくろう」、浅田次郎原作「ラブ・レター」公演の脚本・演出と、新しい取り組みに意欲的なことも、一向に変わっていない。

佇まいは湖面のように静かだが、瑞々

しい精気に溢れている。いつもひたむきに真つ向うから勝負を挑む新藤さんは、真のラスト・サムライではないだろうか。

散歩は別段、楽しいわけでもない。結局、仕事がしたいから

朝7時。プシュッ！とトマトジュースの缶を開けて、新藤さんの一日が始まる。乙羽さんと一緒に撮っていたのと同じ朝食。キャットフードをベランダに出したり、馬刀^{まてばし}葉^は椎^いの木にやつてくる雀にパンくずを用意しておいたり――。

それが終わるとすぐ、8時から日課の散歩に出る。よつほどの嵐の日は別にして毎日2キロくらい、40分ほど歩くという。

「わたしの場合、散歩は、ま、不愉快なことでもないけど、別段楽しくない。普通、年寄りの散歩といえば、悠々たる気分ですものらしいですが、僕にはそれがないですね。足腰がいけなくなったら、脚本は書いても監督はできなくなる。迅速に行動しないと若い人たちに対応できない。高齢者だからって特別扱いされたら、協同作業はできません。だから歩くことにしました。結局、仕事がしたいからです。」

日常のすべての事柄が、まっすぐ仕事

につながってしまう。これが新藤流生き方なのだ。何がここまで新藤さんに、仕事師の道を歩かせるのだろうか。

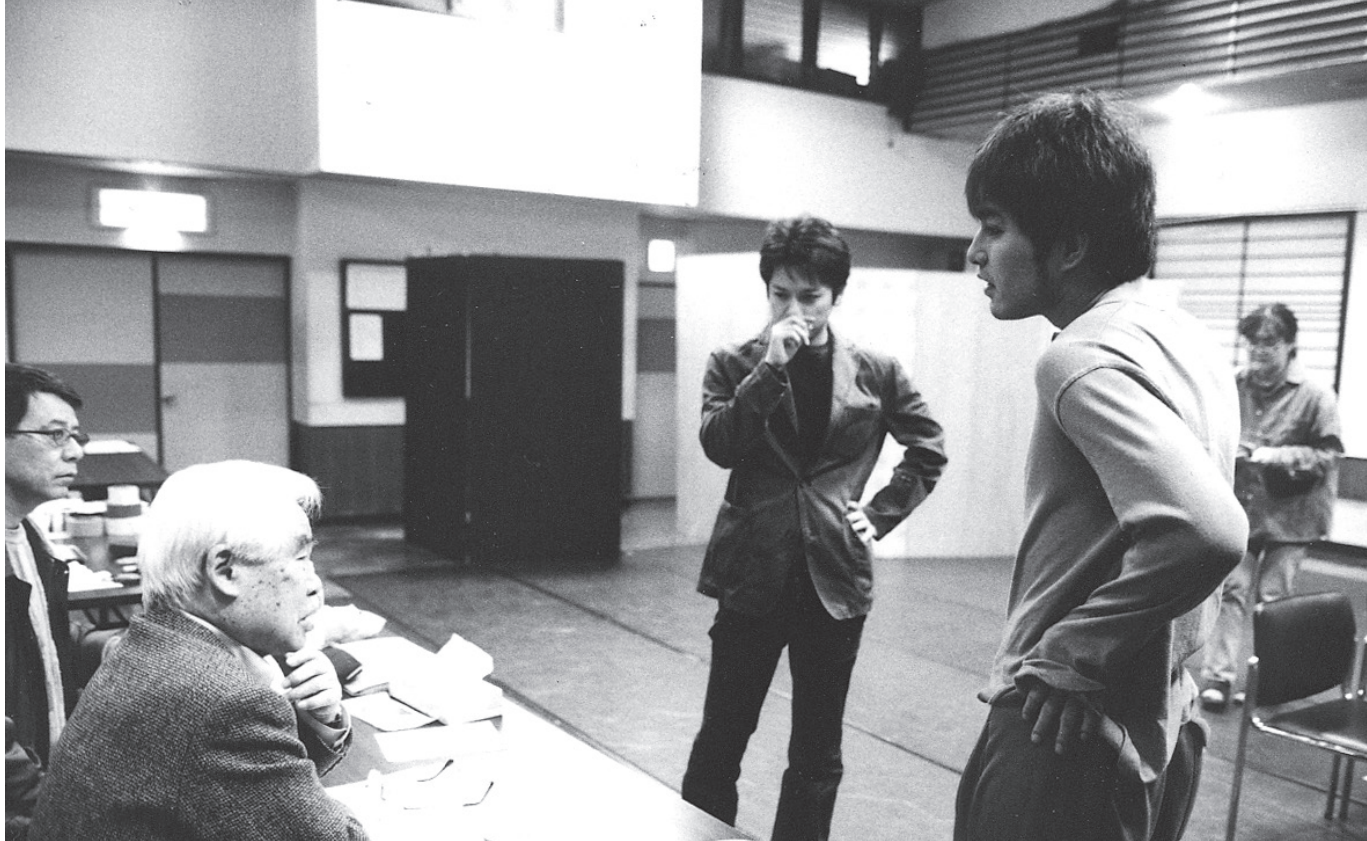
曾祖父さん、お父さん、お母さん、お兄さん、お姉さん

明治45年広島県石内村に四人兄弟の末子として生まれる。家は宮大工をしていた曾祖父が柔をよく遣い、灸点師としても名を挙げて蓄財を成した豪農。

おつとりとした旦那育ちの父の元へ、広島町の町から嫁いで来た母は、大世帯を切り盛りし、農家の嫁として毎日の畑仕事を粛々とこなした。

温暖な広島地方では、稲と麦の二毛作。稲の収穫が終わるとすぐ、今度は麦を撒く準備をする。そのために鍬で稲株を起こし、畝を作らなければならない。

「2町歩（2万平方メートル）くらいはあったでしょうか。気が遠くなりそうな広さでしたね。お母さんは朝ごはんの支度と片付けを終えて、休む間もなく田んぼに出ると一株ずつ起こしていくんです。お昼に家に戻っては、また株を起こす。こうして、何千という稲株を最後まで一人でもくもくと起こし終える。当たり前のことのように、文句を言うわ



’04.2月『ラブ・レター』(博品館劇場)公演稽古中。左から2人目新藤兼人さん。

けでもなく。わたしは最後の一株まで、いつも見てました。一歩一歩進むこと。これが生きることなんだ。お母さんから身をもって教えられたことです。」

しかし、広大な土地も家屋敷まで、人の善い父が請判をしたのをきつかけに手放すことになっていく。兼人少年10歳から15歳の頃だった。

とうとう蔵だけを残して破産し、一家離散。兄は尾道の警察署へ、長姉はアメリカ移民と結婚しカリフォルニアへ渡り、次姉は広島で看護婦になる。こうして父母と三人の蔵暮らしが始まった二年後、母が心労の果て結核で息を引き取る。56歳だった。

「悲しいというより、お母さんが僕を残して死ぬはずがないと思いました。小さい頃からお母さん、お兄さん、お姉さんにわがままを一杯言ってきましたが、可愛いがられた記憶ばかりです。お母さんのは甘酸っぱいお乳の匂いですね。それに声。『カネさーん、夕飯じゃけえ、早よもどりんさあい。』今でもしつかり耳に残ってます。」

新藤作品は、私小説ならぬ私映画だと言われる。家族を描くことは自分自身の表現に他ならない。

新藤さんは話の中で「母」とは言わず、「お母さん」、「姉」「兄」は「お姉さ

ん」「お兄さん」、そして「乙羽さん」と。この「さん」が新藤さんの口からひと度発せられると、爽快な響きとなり、思う人への深い情愛が漂ってくる。

『盤嶽の一生』を観た。

そうだ、映画だ

新藤さんは21歳の頃、まったくの偶然で映画の道を志すことになる。

「わたしは尾道の兄のところに引き取られ、進学を諦めブラブラしてました。気持ちは焦るけど、することがない。そんなとき、看板も見ないで入った映画館でやっていたのが山中貞雄監督の『盤嶽の一生』。衝撃でしたね。これだ、と思ったんです。大河内傳次郎の阿地川盤嶽という侍が、騙されても騙されても世の矛盾と闘って生きていく。解りやすく大衆的なんです。新しい試みがあり、テンポもいい。そうだ、映画だ！と。瀬戸内海の島々を廻る集金のアルバイトをし、京都へ行ったんです。」

後にこの島々が映画『裸の島』のイメージになったというから、生きた足跡は、すべてが無駄にはならない。

京都から東京大泉撮影所へ、また京都。仕事の中身も現像部、美術部からシナリオへと移行した新藤さんは、溝口

健二監督との出会いもあり、本格的にドラマを勉強をしようと『近代劇全集』全43巻を1年がかりで読破。モリエール、チエーホフ、オニール——。世情不安のこの時期に脚本家としての基礎を学んだという。

100人中6人が生還 信念の女 乙羽さんに会う

戦争末期の昭和19年。丙種合格の新藤さんにも赤紙がきた。海軍のための予科練航空隊宿舎掃除、早い話が雑役だった。

100人でその任に就き、籤で60人は輸送船に乘せられてマニラ沖で轟沈。残る40人中、30人も籤で潜水艦行き。潜水艦は死を意味した。後、4人が海防艦で死亡。

6人が残って戦争が終わった。その1人が新藤さん。B29やグラマンが飛び交う2年の間、生きて戻れるとは考えてもみなかったという。

「真底、いい仕事がしたいと思いましたね。折角、生きて帰ってきたんですから。」

順調に脚本家としての実力を認められつつも会社との折り合いがつかず、

独立プロダクションへ近代映画協会へを設立。

初監督『愛妻物語』に宝塚歌劇団を辞めたばかりの乙羽さんが主演決定。その後、乙羽さんも近代映画協会に参加する。以来44年、そのうち入籍してからは17年、公私ともに新藤さんと苦楽を共にし、10年前『午後の遺言状』を取り終えた年の暮れ、乙羽さんが逝く。70歳だった。

「『午後の遺言状』を撮る前の年、乙羽さんは肝臓ガンの手術をし、その時、余命1年半と宣告されました。もちろん本人には言いません。限られた生命なら、のんびりと好きな所へ旅に出るとか、そんな時の過ごし方もあります。でも、乙羽さんはどん底に喘ぐような独立プロの中に自ら飛び込んできて、僕たちを支えてくれた人。途中で倒れて製作中止になったとしても悔いはない、この作品が乙羽さんへの餞だと考えたんです。お終いのほうでは、抗がん剤と高熱で意識が朦朧としたときもありましたが、最後まで女優を全うして、ちょうど1年半で死にました。本当に努力家、信念の人ですね。亡くなる前は、お正月に息子や孫たちに会うのを楽しみにして、あれこれ御土産やご馳走の手配もし、

着ていく和服の準備までしてましてね。その着物を着てあの世へ行きました。」

乙羽さんの墓

乙羽さんのお墓は京都妙心寺塔頭衡梅院にある。亡くなる前年、新藤さんが建てた。

「乙羽さんは、わたしのことを考えて生きてきたように思うんです。それに対して百万回、感謝の言葉を言っても言葉は消えてしまう。それで二人が入る墓を建てました。」天“と彫つてね。“と”人“、（ふたり）を合わせると”天“という字になるでしょ。乙羽さんはまんざらでもない風に笑ってましたよ。」

乙羽さんが買ってきてくれていた2Bの三菱鉛筆と手回しの鉛筆削り。今日も新藤さんは原稿用紙に鉛筆で切り込む。

「乙羽さんがいなくなつて寂しいけど、これは運命だと思つて観念してます。息子たちが一緒に暮らそうと言ってくれますけど、わたしはわがまま言ってます。ひとりも捨てたものじゃないですよ。失った人の思い出が寄り添ってくるから。」

プロフィール

新藤 兼人

しんどうかねと

1912年広島県生まれ。34年新興キネマ美術部入社。溝口健二監督に師事。44年松竹大船撮影所移籍。50年吉村公三郎、殿山泰治らと近代映画協会設立。51年『愛妻物語』で監督デビュー。『裸の島』（60年、モスクワ国際映画祭グランプリ）、『鬼婆』（64年）『ある映画監督の生涯』（74年）、『午後の遺言状』（95年）、『生きたい』（99年）などの作品で数々の映画賞受賞。2002年文化勲章、03年モスクワ映画祭特別功労賞、04年『ふくろう』公開。好エッセイ、評伝など著書多数。